



# 大学生の自閉スペクトラム症傾向と 援助要請スタイルが適応感に及ぼす影響

前田由貴子<sup>1</sup>・金山 裕望<sup>2</sup>・田邊 雅子<sup>3</sup>・佐藤 寛<sup>4</sup>

<sup>1</sup> 大阪大学キャンパスライフ健康支援・相談センター

<sup>2</sup> 志學館大学人間関係学部

<sup>3</sup> 社会福祉法人すいせい

<sup>4</sup> 関西学院大学文学部

**要旨：**本研究の目的は、自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder, 以下 ASD) 傾向と援助要請スタイルが適応感に及ぼす影響について検討することであった。大学生 361 名を対象に質問紙調査を行い、構造方程式モデリングによる解析を行ったところ、ASD 傾向から自立的な援助要請と適応感に対して有意な負のパスが示され、回避的な援助要請に対して有意な正のパスが示された。また、自立的な援助要請から適応感へ有意な正のパス、回避的な援助要請から適応感へ有意な負のパスが示された。このことから、ASD 傾向は直接的に適応感に影響を与えるとともに、援助要請スタイルを介して間接的に適応感に影響を与えることが示された。本研究から、ASD 傾向がある学生の自立的な援助要請行動が適応感に重要な役割を果たすことが示唆され、ASD 者が問題把握しやすくなるような支援を行うことによって、ASD 者の援助要請行動を促進させることが重要であることが示された。

**キーワード：**自閉スペクトラム症傾向 援助要請スタイル 適応感

## I. 問題と目的

日本学生支援機構 (2021) の調査では、全国の大学に在籍する障害学生のうち、約 10% が自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder, 以下 ASD) であるとされている。特に ASD の特徴をもつ学生は、周囲とのコミュニケーションの問題によって不適応を抱えやすく (近藤, 2012)、うつや不安などの併存障

害によって、独立した生計を営むことが難しいこと、教育・雇用面で問題を抱えやすいたことが指摘されている (Spain & Blainey, 2015)。また、ASD 的な行動特性は健常者との間で連続性をもつとされているが (Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, & et al., 2001)、ASD 特性を一定以上もつと、社会適応が困難になり、生活の質 (quality of life; QOL) が低下する可能性が

示唆されている（神尾・森脇・武井他, 2013）。大学生を対象とした調査によると、ASD 傾向が高い学生は ASD 傾向が低い学生と比較して、精神的健康度が低くなりやすく（高林・藤井・菅野, 2013）、抑うつや不安も高いことが示されている（Kanne, Christ, & Reiersen, 2009）。

しかしながら、ASD 傾向をもつことが必ずしも不適応に結びつくということではない。ASD 特性に応じた環境調整が行われていたり、ASD 特性に由来する困難が生じない状況である場合は、ASD 傾向をもつ学生であっても、不適応の部分が小さくなることが指摘されている（大島・鈴木, 2019）。ASD 学生に対する環境調整は学業面だけでなく心理社会面や生活面など多岐にわたる（Ness, 2013）が、彼らの認知特性として、注意の向け方や物事の理解が断片的になりやすいこと、自身に対するモニタリングが働きにくいこと、社会的文脈や人間関係などの複雑な因果関係の理解が困難であること（日戸, 2014）から、ASD 者には社会的状況の理解を促し、対応方法について教示することが重要であり、心理教育的な支援が効果的であるとされている（VanDergeijk, Klin, & Volkmar, 2008）。

一方で、大島・鈴木（2019）は、ASD 者に必要なスキルとして、「困ったときに人に助けを求めるスキル」を挙げている。必要に応じて他者に支援を求める行動は「援助要請行動」（Nelson-Le Gall, 1981）とよばれ、「情動的問題や行動的問題を解決するために、メンタルヘルスサービスや公的サービス、および公的サービス以外の資源に支援を求めること」と定義されており（Srebniak, Cause, & Baydar, 1996）、重要な対処方略のひとつである（永井, 2013）。しかし、援助要請は無条件に望ましい行動であるとはいえず、その質と量を考慮する必要があることが指摘されている（永井, 2013）。永井（2013）は、大学生を対象に援助要請行動の質について調査を行い、独力で解決できない場合にのみ援助を要請する群（援助要請自立群）は、独力で解決しようとせずに安易に援助を要請する群（援助要請過剰群）や、一貫して援助を要請しない群（援助要請回避群）と比較して、心理的適応感が高い可能性を示唆している。また、永井（2016）は、上述の援助要請スタイルが学校適応感に及ぼす影響につ

いて、友人関係のタイプ別に比較を行っている。それによると、援助要請自立傾向は「課題・目的の存在」「被信頼感・受容感」「劣等感のなさ」にポジティブな影響を与えることが報告されており、自立的な援助要請行動は適応感を高める可能性が示唆されている。

援助要請スキルは社会的スキルのひとつであり（本田・新井・石隈, 2020）、援助要請するという意思決定から行動遂行へ向かう過程で、社会的スキルが役割を果たすとされている（島田・高木, 1994）。援助要請行動の意思決定は、「①問題の存在への気づき」「②重要性・緊急性・自己の能力との関係の査定」「③援助要請にかかわるコストと利益の大きさに関する査定」「④適切な援助者はいるか」「⑤援助要請の方略の検討」といった5つの過程から構成され（高木, 1991）、さまざまな認知判断を経て行われる（島田・高木, 1994）。これまでの研究によって、ASD 者は他者に相談することの主観的な意味づけが曖昧であったり、援助を求めることが少ないことが指摘されており（川端, 2019; 岡本・吉原・三宅他, 2016）、ASD 者の社会的スキルの低さ（Ratto, Tuner-Brown, Rupp & et al., 2011）を考え合わせると、ASD 者は援助要請行動を行うことが難しいため、適応感が低いという可能性が考えられる。

上述した援助要請行動の意思決定に照らし合わせると、ASD 者は自身が置かれた状況を把握することが難しく（岡本他, 2016）、失敗を恐れるあまりに自己防衛的になりやすいこと（Grandin & Barron, 2005）が、「①問題の存在への気づき」「②重要性・緊急性・自己の能力との関係の査定」「③援助要請にかかわるコストと利益の大きさに関する査定」に該当すると考えられる。また、ASD 者は自分の興味・関心を他者と共有しようとする動機づけが低いことなどから孤立しやすく（近藤, 2013）、自分の問題を分析し、それを修正するための計画を立て、実行することに困難を有する（木内, 2016）ことは「④適切な援助者はいるか」「⑤援助要請の方略の検討」に該当すると考えられ、援助要請行動を実際にとることの難しさがうかがわれる。

また、ASD 者はその場の状況や雰囲気を読むのが苦手であり、困ったときに助けを求めることができ

ず（原田・萩原・山田他, 2011）, 対人場面を回避しやすい（大藤・松葉・飯島他, 2019）ため、自発的に援助を求めずに援助要請を回避することが推測される。しかし、ASD 者の援助要請行動と適応感の関連についてはこれまでの研究で検討が行われておらず、この関連が明らかになれば、ASD 者への支援介入上の課題を補償する知見を得られる可能性がある。さらに、Rivet and Matson（2011）は、ASD 者の性差を検討する重要性を指摘しており、支援介入の必要性、支援介入において優先される領域、介入すべき標的が明らかになる可能性があると述べている。ASD の女性は相談や支援に対して期待が低いことが示されており（Moseley, Druce, & Turner-Cobb, 2020）、社会的スキルが高く、適応しているようにみえても、心理的な健康度がそれほど高いわけではない（砂川, 2015）。QOL の向上において、ASD の男性と女性では効果的な支援が異なる可能性が示唆されている（砂川, 2019）。

以上を踏まえて本研究では、ASD 傾向が援助要請スタイルと適応感にどのような影響を及ぼすのかについて明らかにすることを目的とする。そのために、「ASD 傾向は直接的に適応感に関連し、その関連性に援助要請スタイルが介在する」という仮説を設定する。具体的には、「高い ASD 傾向は自立型の援助要請行動を低下させる」「高い ASD 傾向は回避型の援助要請行動を上昇させる」「高い ASD 傾向は適応感を低下させる」と想定して検証を行うほか、ASD 傾向が援助要請スタイルと適応感に及ぼす影響について性差がみられるか否かについてもあわせて検討する。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

私立大学1校の人文科学・社会科学系学部の大学生432名（男性110名、女性322名、平均年齢20.12 ± 2.68歳）を調査の対象とした。

### 2. 調査項目

(1) ASD 傾向の測定：ASD 傾向の判定には、自閉性スペクトル指数日本版（Autism-Spectrum Quotient Japanese Version; AQ-J）の短縮版（AQ-J-16）（Baron-Cohen et al., 2001; 栗田・長田・小山他, 2003）を使用

した。AQ-J-16は「私は、人の意図をわかるのがむずかしい」「新しい状況は、私を不安にする」など16項目から構成される自己回答式の尺度であり、健常範囲の知能をもつ成人のASD 傾向を測定できる。回答は4件法で求められ、各項目につき、ASD 傾向が高いとされる側から2つの選択肢を選んだ場合には1点が、低いとされる側から2つの選択肢を選んだ場合には0点が与えられ、高得点ほどASD 傾向を強く示していることを意味する。信頼性および妥当性が報告されており、健常者のASD 傾向の個人差を測定する尺度として有用であることが報告されている（栗田・長田・小山他, 2004）。

(2) 援助要請スタイル尺度：援助要請スタイル尺度（永井, 2013）は、「援助要請過剰型（以下過剰型）」「援助要請回避型（以下回避型）」「援助要請自立型（以下自立型）」の3因子12項目から構成され、信頼性や妥当性が確認されている。項目例は「困ったことがあったら、割とすぐに相談する」「悩みは最後まで、自分一人でかかえる」「先に自分で、いろいろとやってみてから相談する」などである。7件法で回答を求め、それぞれの援助要請スタイルの程度を測定した。

(3) 青年用適応感尺度：大学への適応感を測定するために、青年用適応感尺度（大久保, 2005）を用いた。青年用適応感尺度は、周囲に溶け込み、馴染んでいることから生じる気楽さなどの感覚を表す「居心地の良さの感覚」、課題や目的があることによる充実感を表す「課題・目的の存在」、周囲から信頼され、受容されている感覚を表す「被信頼感・受容感」、周囲との関係による劣等感を表す「劣等感の無さ」の4因子30項目から構成されている。項目例は、「周囲に溶け込んでいる」「嫌われていると感じる」などである。回答は5件法で求められ、高得点ほど適応感が高いことを示し、信頼性や妥当性が確認されている（大久保, 2005）。

### 3. 実施手続き

(1) 調査の時期および実施方法：2017年12月から2018年1月にかけて調査を実施した。調査は講義終了後の時間を利用して行われ、無記名の3つの質問紙を同時に集団配布して回答を求めた。

Table 1 基礎統計量の性差

	男性 n=83		女性 n=278		t 値	d	
	M	SD	M	SD			
AQ-J-16	7.19	2.69	6.44	2.60	2.31*	0.12	
援助要請スタイル	過剰型	14.20	6.14	15.92	5.86	-2.32*	0.11
	回避型	14.53	5.88	12.93	5.99	2.14*	0.12
	自立型	18.78	4.76	18.21	4.20	1.06	0.06
青年用適応感	居心地のよさの感覚	35.88	8.41	39.36	7.93	-3.45**	0.18
	課題・目的の存在	24.68	5.64	25.85	4.89	-1.84†	0.10
	被信頼感・受容感	18.34	4.92	19.00	4.84	-1.09	0.06
	劣等感のなさ	18.77	4.29	19.04	4.00	-0.53	0.03
	合計得点	97.67	18.48	103.24	18.15	-2.44*	0.13

AQ-J-16: Autism-spectrum Quotient Japanese Version (AQ-J) の 16 項目版.

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .

(2) 倫理的配慮：本研究は、大阪国際大学の研究倫理委員会による承認を受けている。調査への回答は任意であり、調査に回答しないことによる不利益は生じないこと、回答の内容によって不利益を被ることはないこと、結果は統計的に処理され個人が特定されないことなどを書面にて対象者に説明し、回答が得られたことをもって同意が得られたものとした。

#### 4. 分析方法

(1) 分析対象者：すべての回答に不備がなかった 361 名（男性 83 名，女性 278 名，平均年齢 19.98 ± 1.41 歳）を調査の対象とした。

(2) 統計処理法：ASD 傾向，援助要請スタイルが適応感に及ぼす影響を検討するため，IBM SPSS Statistics 24 と IBM SPSS Amos 24 を用いて共分散構造分析を行い，モデルの検討を行った。

### III. 結果

#### 1. 性差の検討

各尺度について，男女の  $t$  検定を行った結果，AQ-J-16，援助要請スタイル尺度，青年用適応感尺度に有意な男女差がみられた。AQ-J-16 の合計得点 ( $t(359) = 2.31, p < .05, d = .12$ ) と援助要請スタイル回避型 ( $t(359) = 2.14, p < .05, d = .11$ ) は男性の得点が高く，青年用適応感尺度の合計得点 ( $t(359) = -2.44, p < .05, d = .13$ ) と援助要請スタイル尺度の過剰型 ( $t(359) = -2.32, p < .05, d = .12$ ) は女性の得点が高かつ

た (Table 1)。

#### 2. ASD 傾向，援助要請スタイル，適応感の関連

各変数の基礎統計量，ピアソンの相関係数，クロンバックの  $\alpha$  係数を Table 2 に示す。

モデルでは，ASD 傾向から直接適応感に向かう経路，ASD 傾向から援助要請スタイルに向かう経路，ASD 傾向から援助要請スタイルを介して適応感に向かう経路を仮定した。変数はすべて尺度得点を観測変数とし，援助要請スタイルの各下位尺度の誤差変数間に共分散を仮定した。続いて，有意確率 5% 水準を満たさないパスを削除して再度分析を行った。以上の手続きから得られた最終的なモデルを Figure 1 に示す。モデルの適合度は  $\chi^2(2) = 2.75, p = .25, GFI = 1.00, AGFI = .98, CFI = 1.00, RMSEA = .03$  であり，十分な適合度が得られたため，想定したモデルで検討を行った。

ASD 傾向から援助要請スタイルへは回避型に有意な正のパスがみられ ( $\beta = .11, p < .01$ )，自立型に有意な負のパスがみられ ( $\beta = -.17, p < .001$ )，ASD 傾向から適応感へは有意な負のパスがみられた ( $\beta = -.46, p < .001$ )。次に，援助要請スタイルから適応感へのパスをみると，自立型から有意な正のパス ( $\beta = .16, p < .001$ )，回避型から有意な負のパス ( $\beta = -.23, p < .001$ ) がみられた。

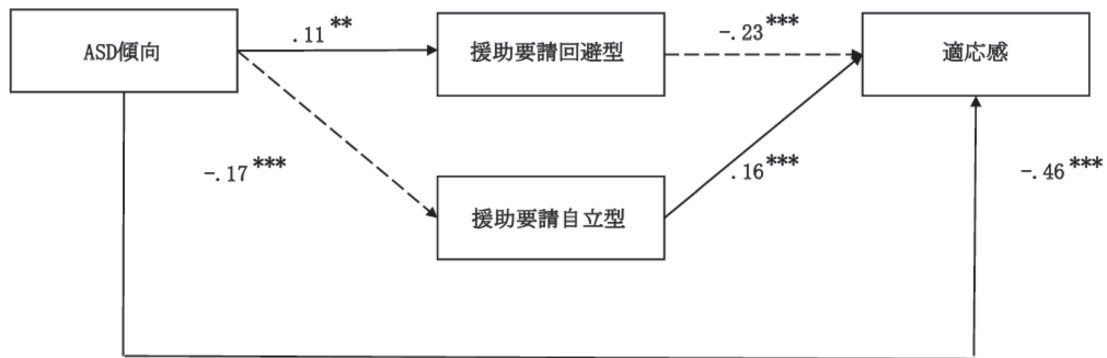
次に，共分散構造分析の結果に基づき，仮説モデルにおける媒介効果を検討するため，リサンプリン

**Table 2** 基礎統計量と信頼性係数, 尺度間の相関係数

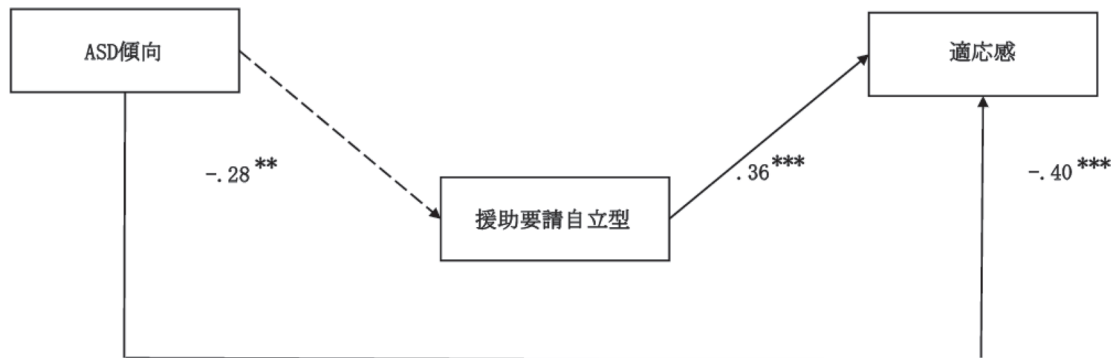
		<i>M</i>	<i>SD</i>	$\alpha$ 係数	1	2	3	4
1. AQ-J-16		6.61	2.64	0.54	—			
援助要請スタイル	2. 過剰型	15.53	5.96	0.91	.05	—		
	3. 回避型	13.30	5.99	0.90	.08	-.63**	—	
	4. 自立型	18.34	4.34	0.75	-.18**	-.22**	.16**	—
5. 青年用適応感		101.96	18.35	0.94	-.51**	.13*	-.24**	.21**

AQ-J-16: Autism-spectrum Quotient Japanese Version (AQ-J) の16項目版.

\* $p < .05$ , \*\* $p < .001$ .



**Fig. 1** ASD 傾向と援助要請スタイル, 適応感の関連  
破線は負のパスを示す. \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .



**Fig. 2** ASD 傾向と援助要請スタイル, 適応感の関連 (男性)  
破線は負のパスを示す. \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

グ数を 5,000 回にしたブートストラップ法を用いてバイアス修正済み 95% 信頼区間を算出した。その結果, ASD 傾向から自立型を経由した適応感への間接効果は  $\beta = -.19$  (95% CI = [-.44, -.05],  $p < .01$ ), ASD 傾向から回避型を経由した適応感への間接効果は  $\beta = -.18$  (95% CI = [-.37, -.04],  $p < .01$ ) であった。

同様に, 男女別に検討を行ったところ, 男性モデルの適合度は  $\chi^2(4) = 5.94$ ,  $p = .20$ , GFI = .97, AGFI = .90, CFI = .97, RMSEA = .08 であり, 許容範囲の適合度が得られた。ASD 傾向から援助要請ス

イルへは自立型に有意な負のパスがみられ ( $\beta = -.28$ ,  $p < .01$ ), ASD 傾向から適応感へは有意な負のパスがみられた ( $\beta = -.40$ ,  $p < .001$ )。援助要請スタイルから適応感へのパスをみると, 自立型から有意な正のパス ( $\beta = .36$ ,  $p < .001$ ) がみられた (Figure 2)。媒介分析の結果, ASD 傾向から自立型を経由した適応感への間接効果は  $\beta = -.70$  (95% CI = [-1.58, -.14],  $p < .05$ ) であった。

女性モデルの適合度は  $\chi^2(4) = 8.97$ ,  $p = .06$ , GFI = .99, AGFI = .95, CFI = .98, RMSEA = .07 であり, 許

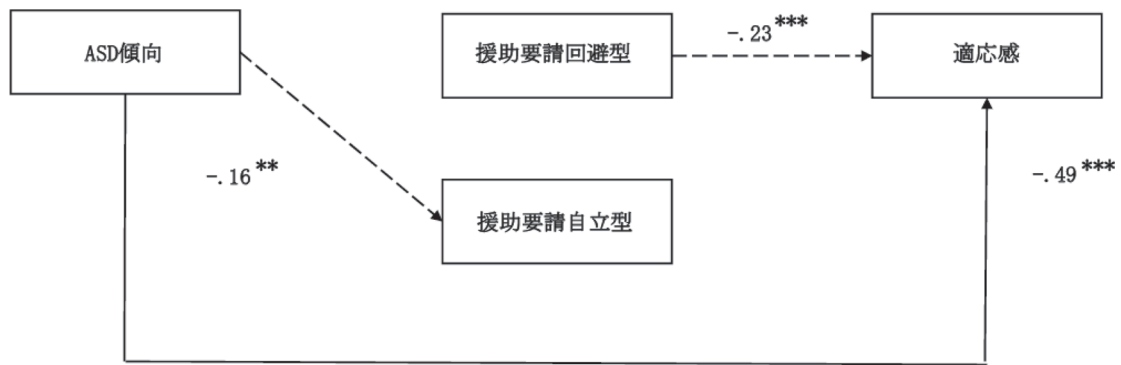


Fig. 3 ASD 傾向と援助要請スタイル、適応感の関連（女性）  
破線は負のパスを示す。 \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

容範囲の適合度が得られた。ASD 傾向から援助要請スタイルへは自立型に有意な負のパスがみられ ( $\beta = -.16, p < .01$ )、ASD 傾向から適応感へは有意な負のパスがみられた ( $\beta = -.49, p < .001$ )。援助要請スタイルから適応感へのパスをみると、回避型から有意な負のパス ( $\beta = -.23, p < .001$ ) がみられた (Figure 3)。

Figure 1, Figure 2, Figure 3 には、観測変数、標準化係数を記載しており、誤差変数間の共変関係は省略している。

#### IV. 考察

本研究の目的は、大学生を対象に、ASD 傾向が援助要請スタイルと適応感に及ぼす影響について、性差も含めて検討することであった。

##### 1. ASD 傾向、援助要請スタイル、適応感の関連

(1) ASD 傾向が援助要請スタイル、適応感に直接与える影響： ASD 傾向から援助要請スタイルの自立型に向かうパスは有意な負のパスであったことから、「高い ASD 傾向は自立型の援助要請行動を低下させる」の仮説が支持され、ASD 傾向から援助要請スタイルの回避型に向かうパスは有意な正のパスであったことから、「高い ASD 傾向は回避型の援助要請行動を上昇させる」の仮説が支持された。また、ASD 傾向から適応感に向かうパスは有意な負のパスであり、「高い ASD 傾向は適応感を低下させる」の仮説が支持された。ASD 者は社会との接触を避ける傾向があり (White & Roberson-Nay, 2009)、ASD 傾向が高い学生は社会適応感が低いことが報告されている (飛田・山田・山根他, 2016)。本研究の結果はこれらの

先行研究を支持するものであり、ASD 傾向のある学生が不適応状態に陥りやすいことが示唆された。

先行研究において、ASD 者は困ったときに人に助けを求めることが苦手であり、自分が困った状態にあることに気がつかず、なんとなくイライラしたり、「面倒くさいからやらない」と放り出してしまうことが指摘されている (大島・鈴木, 2019)。また、状況が曖昧中で行動することが困難であり、試行錯誤しながら物事を進めていくことが難しいとされている (熊谷, 2017)。そのため、困った状態であると自分で認識することが難しく、状況が整理されない中では、自ら問題解決方法を試行することが困難であることが推測される。近年、発達障害者への支援方法として取り入れられているコーチングでは、①現状の明確化、②望ましい状態の明確化、③ギャップを起こしている理由と背景の発見、④行動計画策定、⑤フォロー実施、の流れでコーチが支援を行うとされており (伊藤, 2002)、これらの過程を経ることで、発達障害者がスキルを実践する見通しをもち、自身に必要な計画や課題を決定しやすくなることが示唆されている (秋元, 2019)。実際に、ASD の大学生を対象にコーチングが実践された結果、学生が自己理解を深め、時間管理やストレスコントロールなどのスキルを遂行しやすくなったことが報告されている (秋元, 2019)。ASD 者には、現状把握を行って課題を整理し、課題解決に向けた行動を策定する支援が必要になると考えられる。

(2) 援助要請スタイルと適応感の関連： 援助要請スタイルの回避型から適応感に向かうパスは有意な負のパスであり、援助要請スタイルの自立型から適応感

へ有意な正のパスがみられた。肥田・田中・石川(2015)は、援助要請を過剰に行うことや回避することが、ストレス反応を高め、友人満足感を低減させることを指摘しており、自立型の援助要請スタイルが適応感の向上につながることを予想される。また永井(2016)は、相談するという自己開示が適応的な友人関係を支える可能性について述べている。このことから、援助要請を回避することは、サポートを受ける機会を減少させるだけでなく、他者と親密な関係性を形成する機会をも減少させる可能性があることが推測される。

## 2. 性差

小林(2006)は大学生を対象にAQ-J-16を用いた調査を行い、男性平均7.19点( $SD=2.74$ )、女性平均6.63点( $SD=2.66$ )であったことを報告している。本調査の結果と比較しても、同程度の平均値(男性平均7.19点; $SD=2.69$ , 女性平均6.44点; $SD=2.60$ )が得られたと考えられる。また大久保(2005)は、大学生を対象に青年用適応感尺度を用いた調査を行い、男性では、居心地のよさの平均が34.82点( $SD=9.27$ )、課題・目的の存在の平均が24.16点( $SD=6.41$ )、被信頼・受容感の平均が17.08点( $SD=4.87$ )、劣等感のなさの平均が20.98点( $SD=4.73$ )であったこと、また女性では、居心地のよさの平均が37.88点( $SD=8.39$ )、課題・目的の存在の平均が25.76点( $SD=5.35$ )、被信頼・受容感の平均が17.86点( $SD=4.02$ )、劣等感のなさの平均が21.41点( $SD=4.16$ )であったことを報告している。本調査の結果では、男性の居心地のよさの平均が35.88点( $SD=8.41$ )、課題・目的の存在の平均が24.68点( $SD=5.64$ )、被信頼・受容感の平均が18.34点( $SD=4.92$ )、劣等感のなさの平均が18.77点( $SD=4.29$ )、また、女性の居心地のよさの平均が39.36点( $SD=7.93$ )、課題・目的の存在の平均が25.85点( $SD=4.89$ )、被信頼・受容感の平均が19.00点( $SD=4.84$ )、劣等感のなさの平均が19.04点( $SD=4.00$ )であり、大久保(2005)の調査と同程度の平均値が得られたと考えられる。

これまでの援助要請研究では、男性よりも女性のほうが援助を求めやすいことが示されており(水野・石隈, 1999)、大学生に青年用適応感尺度を用いた大久

保(2005)の調査では、「劣等感のなさ」の因子を除くすべての因子で、女性が男性よりも有意に得点が高いことが報告されている。これらのことから、本研究と先行研究の結果はおおむね一致していた。

男女別の共分散構造分析を行った結果、ASD傾向がある男性は、自立型の援助要請スタイルを行うことで、適応感の向上をもたらしやすいことが示唆された。一方で、ASD傾向がある女性は、自立型の援助要請スタイルを行う傾向が低いことが示された。ASDの女性は、社会的なスキルが高い場合、困難な状況であっても適応する努力を重ねることによって表面的に適応しているようにみえることが示唆されており(砂川, 2015)、自立的に援助を求めることが難しい可能性がある。ASDの女性が抱える生きづらさや支援の必要性が認識されにくいこと(砂川, 2015)に注目することは重要であるが、本研究の結果からは適応感との関連が示されなかったため、さらなる検討が必要である。また、女性は回避型の援助要請スタイルを行うことで適応感が低下しやすいことが示された。援助要請回避型は、他者の力を借りることができない一方で、自身でも問題を対処できずに困っている可能性が示されているため(永井, 2019)、積極的な支援介入が必要になると考えられる。

## 3. 本研究からの示唆

本研究の結果、ASD傾向が援助要請行動を介して適応感に影響を与える可能性が示され、ASD者の自立的な援助要請能力を養うことが重要であることが示された。

一方で、ASD者は今後のことを具体的に想像できないために、将来に関して切実な不安を抱くことが少なく(近藤, 2013)、自身が置かれている状況を把握していないことが多い(岡本他, 2016)。また、ASD者は、他者と比較してできないことを認識したり、他者から求められることにうまく反応できないことで「できない自分」や「ダメな自分」を認識しやすく(木谷, 2015)、自身の社会性を否定的に捉えることによって、対人場면을回避しやすい(大藤他, 2019)。これらのことから、自身の置かれた状況を把握して問題に気づき、支援ニーズを明らかにして、他者に援助を求めることは難しいことが推測される。そのため、

ASD 者が経験した出来事の文脈や、周囲の人たちの意図や反応の意味を解説する(近藤, 2013) ことによって、ASD 者が問題把握を行いやすくなるよう支援することが重要だと思われる。加えて、ASD 者は失敗を恐れるあまりに自己防衛的になりやすく、援助要請を行うことが難しいため、どうすればよいかわからないときや手に負えないときは訓練や助言を求めると(Grandin & Barron, 2005) を教示し、周囲の人とともに問題を解決して乗り越える経験を積み重ねることで、失敗しても大丈夫という感覚を身に着けることが重要である(大島・鈴木, 2019)。

#### 4. 本研究の限界と課題

今後の課題としては、以下の2点があげられる。

1点目は、対象者が限定されていることである。本研究は、一大学の人文社会科学系の学生を対象としており、かつ女性の割合が高いため、結果の一般化には慎重になる必要がある。今後は、対象者に男性の割合を高め、複数の大学の自然科学系の学生も含めた大規模な調査を行う必要がある。

2点目は、各援助要請スタイルが個人に及ぼす影響について詳細に検討を行うことである。本研究では、適応感の指標として学校適応感を用いているが、心理的な適応感についても考慮する必要がある(永井, 2016)。また、村山・及川(2005)が指摘しているように、援助要請行動を回避することがただちに非適応的であるとは限らず、目標レベルで回避的であるか否かを確認する必要がある。加えて、依存欲求が高い個人は他者への信頼感が高い(竹澤・小玉, 2004) ことから、援助要請を過剰に行うことの肯定的な側面についても考える必要がある(永井, 2013)。さらに、ASD 者は過大評価を行いやすいため(Lerner, Calhoun, Mikami et al., 2012)、第三者による評価も加え、交差遅延効果モデルなどを用いた変数間の因果関係を分析することによって、さらなる検証を行うことが重要である。

#### 謝辞

本研究は大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部特別研究費の助成を受けたものである。

#### 引用文献

- 秋元 孝城 (2019). 自閉スペクトラム症の学生に対する「コーチング」の実践. 明星大学発達支援研究センター紀要, 4, 45-60.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E. (2001). The autism-spectrum quotient (AQ): Evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 5-17.
- Grandin, T., & Barron, S. (2005). *Unwritten rules of social relationships: Decoding social mysteries through the unique perspectives of autism*. Future Horizons, Texas. 門脇陽子訳 (2009). 自閉症スペクトラム障害のある人が才能をいかすための人間関係の10のルール. 明石書店.
- 肥田 乃梨子・田中 あゆみ・石川 信一 (2015). 大学生の援助要請スタイルの違いがストレス反応および友人関係満足感に及ぼす影響. 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 355.
- 原田 謙・萩原 徹也・山田 慎二・篠山 大明・鷲塚 伸介 (2011). 自閉症スペクトラム障害における自己理解と対処スキルに関する研究. 研究助成論文集 明治安田こころの健康財団編, 47, 100-109.
- 本田 真大・新井 邦二郎・石隈 利紀 (2020). 援助要請の機能性の向上を目標とした行動的介入の試み—援助要請スキルトレーニングの効果検証—. 学校臨床心理学研究 (北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要), 17, 11-21.
- 伊藤 守 (2002). 人と組織のハイパフォーマンスをつくるコーチング・マネジメント. デイスクヴァー・トゥエンティワン.
- 神尾 陽子・森脇 愛子・武井 麗子・稲田 尚子・井口 英子・高橋 秀俊・中鉢 貴行 (2013). 未診断自閉症スペクトラム児者の精神医学的問題. 精神神経学雑誌, 115, 601-606.
- Kanne, S. M., Christ, S. E., & Reiersen, A. M. (2009). Psychiatric symptoms and psychosocial difficulties in young adults with autistic traits. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 39, 827-833.



- 川端 奈津子 (2019). 就職した自閉スペクトラム症者が困難に対処しながら働き続ける過程. *自閉症スペクトラム研究*, 17, 43-51.
- 木内 敬太 (2016). 成人の発達障害者のためのコーチングの可能性—高等教育と職域の架け橋として—. *支援対話研究*, 3, 15-29.
- 木谷 岐子 (2015). 自閉症スペクトラム障害の成人当事者が抱える「自分」—M-GTAを用いた質的研究—. *北海道大学大学院教育学研究院紀要*, 122, 1-25.
- 小林 由佳 (2006). 大学生における軽度発達障害に関する調査とその支援. *研究助成論文集 明治安田こころの健康財団編*, 42, 30-36.
- 近藤 直司 (2012). 青年期のひきこもり問題と ASD. 神尾 陽子 (編), *成人期の自閉症スペクトラム診療実践マニュアル*. 医学書院, p. 51.
- 近藤 直司 (2013). 社会的ひきこもりと自閉症スペクトラム障害. *自閉症スペクトラム研究*, 10, 37-45.
- 熊谷 高幸 (2017). 5章 心と体のかみ合いにくさ. *自閉症と感覚過敏 特有な世界はなぜ生まれ, どう支援すべきか*. 新曜社, pp. 75-77.
- 栗田 広・長田 洋和・小山 智典・宮本 有紀・金井 智恵子・志水 かおる (2003). 自閉性スペクトル指数日本版 (AQ-J) の信頼性と妥当性. *臨床精神医学*, 32, 1235-1240.
- 栗田 広・長田 洋和・小山 智典・金井 智恵子・宮本 有紀・志水 かおる (2004). 自閉性スペクトル指数日本版 (AQ-J) のアスペルガー障害に対するカットオフ. *臨床精神医学*, 33, 209-214.
- Lerner, M. D., Calhoun, C. D., Mikami, A. Y., & De Los Reyes A. (2012). Understanding parent-child social informant discrepancy in youth with high functioning autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 42, 2680-2692.
- 水野 治久・石隈 利紀 (1999). 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向. *教育心理学研究*, 47, 530-539.
- Moseley, R. L., Druce, T., & Turner-Cobb, J. M. (2020). 'When my autism broke': A qualitative study spotlighting autistic voices on menopause. *Autism*, 24, 1423-1437.
- 村山 航・及川 恵 (2005). 回避的な自己制御方略は本当に非適応的なのか. *教育心理学研究*, 53, 273-286.
- 永井 智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—. *教育心理学研究*, 61, 44-55.
- 永井 智 (2019). 援助要請スタイル間の差異に関する探索的検討—援助要請過剰型・回避型の特徴—. *教育心理学研究*, 67, 278-288.
- 永井 暁行 (2016). 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連. *教育心理学研究*, 64, 199-211.
- Nelson-Le Gall, S. (1981). Help-seeking: An understudied problem-solving skill in children. *Developmental Review*, 1, 224-246.
- Ness, B. M. (2013). Supporting self-regulated learning for college students with Asperger syndrome: Exploring the "Strategies for college learning" model. *Mentoring & Tutoring: Partnership in Learning*, 21, 356-377.
- 日本学生支援機構 (2021). 令和3年度 (2021年度) 大学. 短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書.
- 日戸 由刈 (2014). 青年期の自閉症スペクトラムの人たちへの発達支援—心理面接のあり方を中心に—. *こころの科学*, 174, 57-62.
- 岡本 百合・吉原 正治・三宅 典恵・永澤 一恵・矢式 寿子・内野 悌司・磯部 典子・黄 正国・小島 奈々恵・二本松 美里 (2016). 大学生における自閉症スペクトラム—理解と支援—. *総合保健科学 広島大学保健管理センター研究論文集*, 32, 17-24.
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—. *教育心理学研究*, 53, 307-319.
- 大島 郁葉・鈴木 香苗 (2019). 思春期・おとなの自閉スペクトラム症: 当事者・家族の自己理解ガイド. 金剛出版.
- 大藤 健寛・松葉 百合香・飯島 有哉・桂川 泰典 (2019). 自閉症傾向を持つ大学生における対人不安と社会的スキルの自己評価が対人場面からの回避行動に与える影響. *早稲田大学臨床心理学研究*, 19, 21-27.

- Ratto, A. B., Tuner-Brown, L., Rupp, B. M., Mesibov, G. B., & Penn, D. L. (2011). Development of the contextual assessment of social skills (CASS): A role play measure of social skill for individuals with high-functioning autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 41*, 1277-1286.
- Rivet, T. T., & Matson, J. L. (2011). Review of gender differences in core symptomatology in autism spectrum disorders. *Research in Autism Spectrum Disorders, 5*, 957-976.
- 島田 泉・高木 修 (1994). 援助要請を抑制する要因の研究 I—状況認知要因と個人特性の効果について—. *社会心理学研究, 10*, 35-43.
- Spain, D., & Blainey, S. H. (2015). Group social skills interventions for adults with high-functioning autism spectrum disorders: A systematic review. *Autism, 19*, 874-886.
- Srebniak, D., Cause, A. M., & Baydar, N. (1996). Help-seeking pathways for children and adolescents. *Journal of Emotional and Behavioral Disorders, 4*, 210-220.
- 砂川 芽吹 (2015). 自閉症スペクトラム障害の女性は診断に至るまでにどのように生きてきたのか—障害を見えにくくする要因と適応過程に焦点を当てて—. *発達心理学研究, 26*, 87-97.
- 砂川 芽吹 (2019). 成人期に診断を受けた自閉スペクトラム症者の QOL—ASD 特性との関連から—. *自閉症スペクトラム研究, 16*, 53-60.
- 高林 大輝・藤井 靖・菅野 純 (2013). 自閉症スペクトラム傾向の高さが精神健康度と被援助志向性および大学生活に及ぼす影響. *早稲田大学臨床心理学研究, 12*, 45-54.
- 高木 修 (1991). 向社会的行動における「自己」の機能. *関西大学社会学部紀要, 22*, 109-127.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討. *教育心理学研究, 52*, 310-319.
- 飛田 彩也香・山田 純栄・山根 寛・仙田 裕樹・石川 順子 (2016). 大学生・大学院生を対象とした高機能自閉症スペクトラム障害傾向の高い者の特徴—自動思考, ストレス対処行動, 社会適応に着目して—. *作業療法, 35*, 327-330.
- VanDergeijk, E., Klin, A., & Volkmar, F. (2008). Supporting more able students on the autism spectrum: College and beyond. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 38*, 1359-1370.
- White, S. W., & Roberson-Nay, R. (2009). Anxiety, social deficits, and loneliness in youth with autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 39*, 1006-1013.

—2022.2.1 受稿, 2023.3.10 受理—

Practical Research

## The Relationships among Autistic Tendencies, Help-Seeking Styles and Adjustment to School in University Students

Yukiko MAEDA <sup>1</sup>, Yumi KANEYAMA <sup>2</sup>, Masako TANABE <sup>3</sup> and Hiroshi SATO <sup>4</sup>

<sup>1</sup> Health and Counseling Center, Osaka University

<sup>2</sup> Faculty of Humanities, Shigakukan University

<sup>3</sup> Social Welfare Corporation SUISEI

<sup>4</sup> School of Humanities, Kwansei Gakuin University

*Japanese Journal of Higher Education and Disability*, 5(1), 1–11, 2023

**Abstract:** This study investigated the effects of autistic tendencies and help-seeking styles on adjustment to university. A total of 361 undergraduate students completed the Autism Spectrum Quotient (Japanese Version). Furthermore, they completed scales measuring help-seeking styles and subjective adjustment to school among adolescents. Using structural equation modeling analysis, the results suggested that autistic tendencies significantly negatively affected self-directed help-seeking behaviors and subjective adjustment to school in adolescents and significantly positively affected avoidance of help-seeking behaviors. Students who engaged in self-directed help-seeking behaviors experienced a sense of adaptation. Contrastingly, those who avoided help-seeking did not feel that they had adapted well. These results suggest that autistic tendencies negatively affect adolescents' subjective adjustment to school both directly and indirectly via self-directed help-seeking behaviors. The results also suggest that self-directed help-seeking behaviors in students with autism spectrum disorder are vital in adaptation. The findings highlight the importance of promoting help-seeking behavior by providing support to help individuals with autism spectrum disorder understand their challenges and learn how to solve them.

**Key words:** autistic tendencies, help-seeking styles, adjustment to university

---

Corresponding author: Yukiko MAEDA, Osaka University